

あさひ薪づくり研究会

調査団体名	あさひ薪づくり研究会	団体代表者名	安藤征夫
設立年	2014(平成26)年2月	対応してくれた人の名前	安藤征夫
団体URL			
活動拠点	豊田市東萩平町	調査員	高橋伸夫、大森正昭
取材日	2015年12月5日	レポート作成者	大森正昭

活動内容

あさひ薪づくり研究会は、旭木の駅プロジェクトによる間伐材の販売方法では採算が合わないため、もう少し付加価値の高いものをつくろうと、旭木の駅プロジェクトの中の10人でつくった。

旭木の駅プロジェクトは現在チップ販売だけで、市の補助があるものの採算的に苦しい状況となっている。このため、あさひ薪づくり研究会で間伐材を薪にして儲け補填している。平成27年からはストーブ販売も行っている。

薪の材は、旭木の駅プロジェクトから購入するものと、直接購入との2種類があり、自分達も忙しいため、直接購入する分については、玉切り済みならより高価に買い取る仕組みもつくった。

これらがあさひ薪づくり研究会のハード事業。

あさひ薪づくり研究会のソフト事業として、平成26年8月17日からツリーハウスづくりを一般公募し、30家族108名の親子と一緒にツリーハウスや遊具をつくりながら毎月2回の活動を行っている。

この活動は、小さい頃から森に親しむことにより、実体験として空気や水を育む森の大切さを分かってもらい、この子達が大人になった時、森の大切さや山の管理の大切さを理解出来るようにしている。

キャッチフレーズ

やる気があれば何とかなる。

会のモットー(何を大切にしているか)

山を自分自身が体感する。次世代のために森を維持する。

設立から現在に至るまで変化したこと

計画したことがスピード感を持って着実に進んでいる。例えば、平成26年の2月に会を設立しその年の9月から薪が売れ、百二十万の売り上げがあった。

販売先は、田舎では売れないので知立、岡崎、安城、春日井など都会への販売である。

ツリーハウスは、平成26年の8月に始め、既にハウスや園地・遊具も出来つつあり、順調に進んでいる。

また、子ども達の家族を対象にしたツリークライミングも年2回行っている。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知学泉大が、平成28年からまちづくり活動の授業として、この地域の課題を一緒に解決していくことを単位として認め、1年生から3年生までの3年間かけて学習する仕組みをつくろうとしている。そのほかに名城大学、愛知産業大学や木の駅プロジェクトなど。「山村再生担い手づくり事例集」に載っている団体のほとんどみんな関係している。

また、ツリーハウスを造っている先生は、建築家の安井さん及びサツキとメイの家をつくった棟梁の中村さんで、月に一回来て頂いている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

薪づくりは、間伐の推進を目的にしているため、針葉樹を優先している。従って8割が針葉樹で、広葉樹のみの薪が欲しいと言われる方には基本的には提供していない。

私は空き家を解消する活動をしており、今までに15軒50人ぐらいの世話をした。平成27年もこの近所の空き家を5月と7月にうめ、10月にも面接をし、22戸の集落で3軒の世話をした。

今、この自治体の定住促進部長として、こうした交渉の出来る人材を来年の4月までに10人は育てようと、毎月交渉術や空き家に関する法律などの勉強会を行っている。

現在直面している課題

「あさひ薪づくり研究会」から、研究会の文字をとって自立団体とすること。

今後やってみたいこと

荒れ農地の解消では、農地を農地として貸そうと思うと面積が広く、都会から来た人は機械がないと耕作出来ない。そこで荒れ農地を薪置き場として貸すことで、家族とともにここに来て木に親しみつつ山での遊びも出来、薪づくりを育めるように考えた。現在は畑2枚を薪置き場として無償で貸している。地主さんからは管理してもらえれば草刈りもせずすむと了解していただいている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

日々アンテナを高くし、たくさんの情報を収集したい。どんな情報でも良い、何かの役に立つ。例えば後進地の視察でも、やってはいけないことが分かり勉強になる。また、多くの人と話すこと、それも自分の地域外の人と話すことで多くの情報が得られる。

チームオリジナルの質問

<質問内容>色々な取組をされていますね。

<答え>次の世代の森に係わる人を育成したい。

平成27年4月から始めた私塾「ガキ大将養成講座」は、座禅や山登りなどをつうじて、義理と人情のある子ども達を育てよう取り組んでいる。これには、名古屋、瀬戸、浜松などの街の子ども達が参加している。

さらに、名古屋の今池の子供会を呼び田植えや間伐をしてもらったり、また、ファミリー登山部をつくって、小学生を対象に年に数回の登山をしたりもしている。まだ退職前だが、仕事よりも忙しい日々を送っている。

その他、伝えたいこと

今は、自分の活動が流域圏としてみた時にどういう位置にあるのか把握出来ない。流域圏全体で顔の見える関係をつくっていくことが出来ないか。顔が見える関係になれば、山の人が海を汚してはいけない、海の人が山に木を植えない、という気持ちが生まれるのではないか。

写真



右が「旭薪づくり研究会」と
「あさひガキ大将養成委員会」の安藤さん



新築中の
「さくら村
ツリーハウス



「旭薪づくり研究会」には、このよ
うな土場が5つある



「さくら村秘密基地」も増設中だ